

互いに紹介しあったりという協力関係にもあ

我が国の高等教育機関における手話通訳養成の取り組み②様々なチャレンジ・・・

いわゆる「養成校」以外にも、高等教育機関（大学・短期大学・専門学校）で手話通訳を養成している、しようとしている様々な取り組みがあります。

社会福祉主事任用資格を取得できかつ手話通訳を目指せるよう指導している私立の専門学校として、学校法人敬心学園 日本福祉教育専門学校社会福祉学科手話通訳コース（2003年～）は既に15年の歴史を持っています。手話通訳一本で生計を立てることの難しい現状をふまえ、卒業後に福祉の専門家として活躍できるようカリキュラム編成を工夫し、手話通訳士・者を輩出してきました。

4年制の大学では、長年、聴覚障害者大学教育プロジェクトを展開してきた日本社会事業大学が、2016年度から聴覚障害者支援スペシャリスト（手話通訳・パソコンテイク・盲ろうコミュニケーション支援）を目指す人を対象とした「コミュニケーションバリアフリー課程」を開講しています。こちらの手話通訳課程は現役手話通訳者を対象としているという点でSiLLRの試みと共通する面もあるかと思えます。

また、群馬大学は昨年度（2017年度）日本財団助成「学術手話通訳に対応した通訳者の

連載を終えるにあたって・・・・・・・・・・・・・・・・

連載を終えるにあたり、最後に少しか個人的事を書かせてください。私とろう者との出会いは、学生時代でした。趣味や志を同じくするろうの学生と大学で同級生として出会ったことが手話の世界を知る直接的なきっかけでした。以来、40年近く、ずっと…国内に居ながらにして異文化留学を経験させても

りました。

養成」事業を開始しました。在学生在が学内での手話による情報保障の担い手になれるよう、そして大学在籍中に手話通訳士・者資格が取得できるよう正規の授業で指導するという試みで、地域養成システムとも協働していくそうです。将来的には、全国の教育・福祉系大学のモデルケースとなることを目指していると聞いています。社会事業大学、群馬大学の場合、手話通訳による情報保障を必要としている在校生（ろう学生）が在籍し、明確なニーズが存在することが事業を展開するうえでの大きな強みであると思います。

4年制大学という、かつては金城学院大学人間科学部コミュニティ福祉学科も、士協会前副会長の林智樹さんご指導の下、正規科目として手話を取り入れ、手話通訳士資格取得に対応した授業を展開していらっしゃいましたね。コミュニティ福祉学科 HP を拝見したところ、取得サポート資格として今でも手話通訳士が掲げられています。

これらの様々な試みが同時多発的に起きているということに、専門領域に対応しうる手話通訳のニーズが如実に表れていると思えます。

らっているという気持ちでいます。生まれて初めての手話通訳経験も、手話通訳コーディネーター的な役割体験も、大学ででした。

手話（通訳）一本で生計を営むことが大変難しい…という環境の中、社会人デビュー以来ずっと、なんらかの形で手話（通訳）と関わる仕事をさせてもらってきました。その私が、お

そらく（職業人として）最後の所属になるだろうみんなくで学術手話通訳者を養成するというミッションを負っていることに、多少なりとも、運命的なものを感じずにはられません。

この連載でも何度か言及したように、「良い手話通訳」を目指す時に必要とされる基本的な学びは、通訳対象領域がなんであれ…コミュニティであれ学術であれ、大きく違うこと

SiLLR 学術手話通訳研修事業情報配信 ML 情報・・・・・・・・・・・・・・・・

SiLLR 学術手話通訳研修事業情報配信メーリングリスト（ML）を作成しました。学術手話通訳研修事業、関連講座、その他手話や手話通訳に関連する学術領域・SiLLR 関連イベントの情報を不定期にメール配信いたします。ML への登録を希望される方は、氏名・氏名ふりがな・登録希望メールアドレスを明記のうえ、下記の申し込みアドレス宛にお申込み

はありません。言語通訳として「基本的な学び」をしっかり身に付けた手話通訳の卵が、それぞれの得意分野や適性に準じて通訳対象領域を選びうる。その選択対象のひとつとして「学術」分野がある…そういう時代の到来のために、SiLLR の試みが、そして自分自身が、何らかの貢献をなせるようお願いしつつ、残された時間、日々の事業に取り組んでいきたいと思っています。

ください。（登録アドレスは長文メールの受け取れるものをご連絡ください。）お申込み後、数日内に登録いたします。また、手話や手話通訳に関連する「学術領域イベント情報」の配信を希望される方も、文案を作成の上、以下のアドレスにご連絡ください。

ML 登録・情報配信申込アドレス：
shuwagengo@minpaku.ac.jp

リレートーク

250

終の棲家

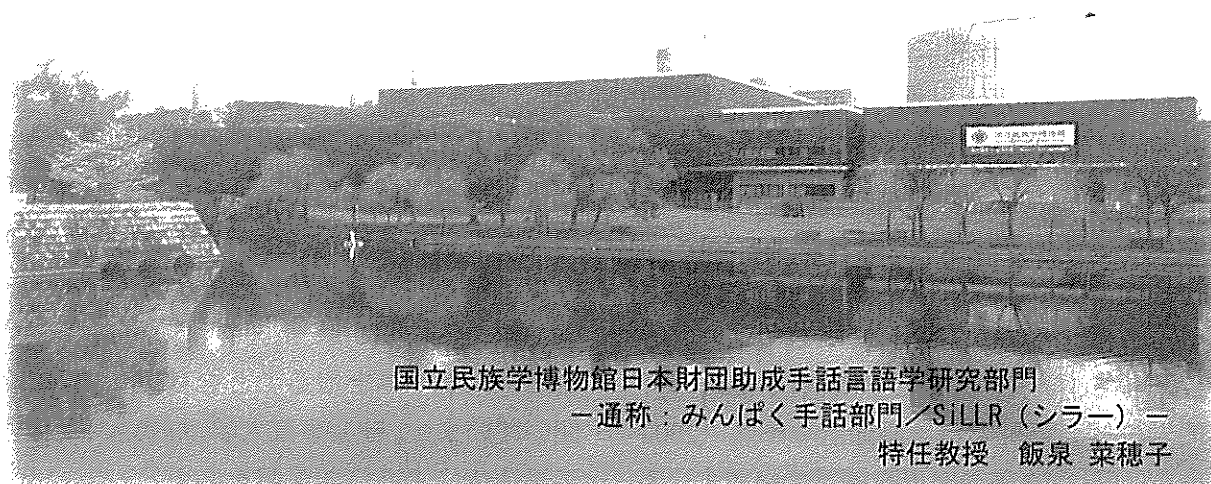
上石栄（群馬県）

栃木の宮さんから「一生のお願い」と平日の昼間に電話があり、他県の私のところまで電話がくるとは、これは緊急事態か！時間が間に合うなら大丈夫と答えたところ、このリレートークの話でした。う～ん確かに日程は大丈夫だけど…お世話になっている宮さんからの「一生のお願い」、あと何回あるのだろうかと思いながら、バトンを受けさせていただきました。

上石（かみいし）と申します。個人的にはど

こにでもいるような平凡な容貌だと思っているのですが、皆さんからは人混みの中でも見つけやすいとよく言われています。生まれも育ちも栃木で、大学の4年間だけ栃木を離れただけの栃木人ですが、手話に関しては群馬生まれの栃木育ちで、繰り出す手話表現はぐちゃぐちゃ。これはどっちだった？と一瞬迷ってしまい、ろう者の「ん？」という表情に、ああ～違った栃木弁（あるときは群馬弁）になっているのか、手話が間違っているのか、反省

みんぱくでの学術手話通訳養成事業の取り組み⑧<最終回>



国立民族学博物館日本財団助成手話言語学研究部門
—通称：みんぱく手話部門／SiLLR（シラー）—
特任教授 飯泉 菜穂子

SiLLR での学術手話通訳養成事業に取り組む中で感じていること・・・・・・・・

8 回にわたって連載の機会をいただいたこのエッセイ、今回が最後となります。前々回、私は、これまで SiLLR で学術手話通訳養成に取り組む中で感じていることとして二つのことを挙げました。一つは、日本における手話通訳養成システムにもっとも「言語通訳としての手話通訳」を育てるための理論や仕組

みの導入が必要であるということ。もう一つは、言語通訳としての手話通訳を育てるためには、高等教育機関における養成が不可欠だということです。

連載をまとめるにあたり、今回は、二つ目の視点、高等教育機関における手話通訳養成について書いておきたいと思います。

我が国の高等教育機関における手話通訳養成の取り組み①通訳養成校・・・・・・・・

「学科カリキュラムの全てを手話通訳士・者養成に特化して構成している」手話通訳士・者「養成校」は、現在、国立障害者リハビリテーションセンター学院（通称：国リハ）手話通訳学科（1990 年～）一校だけになってしまいました。国リハに遅れること 10 年後に私立として初めての手話通訳（士・者）養成校の名乗りを上げて教育を行っていた学校法人大東学園 世田谷福祉専門学校（通称：せたふく）手話通訳学科・手話通訳専攻学科（2000 年 4 月～2016 年 3 月）が、15 期生の卒業をもって閉鎖となったからです。

せたふくは私の前任校です。学科設立当初は 2 年間は理論講座を担当する非常勤講師と

して、3 年目から学科閉鎖までの 14 年間は本科・専攻科両学科の責任者として学科運営と教育に関わってきました。国リハとせたふくは受け入れる学生の（年齢）層や教員・設学のバックグラウンドなどは夫々の特徴を備えていましたが、「言語通訳としての手話通訳」を育てるという基本目標は共通していました。手話話者の用いる自然言語としての日本手話の導入からスタートし、習得目標とする日本手話による専門領域の授業（いわゆるイメージプログラム）をも提供すること、学校外の現場実習の機会を豊富に担保することなどカリキュラム構成も共有するところが多く、非常勤講師の先生方も多くが共通していたり、